

ほな、歴史通信

第19号

2001.6.1

春の北浦町訪問記

「生きるための究極の苦勞は武田村に開拓のため入植してからだだった。」

これは、今年三月二十六（月）、二十七（火）の両日にわたって満蒙開拓の引き揚げ者からの聞き取り調査で聞かされた、私にとって最もショッキングな言葉であった。

満州事変、満州建国と歴史が動くなかで、大子町の満州国への分村計画が具体化して昭和十五年に先遣隊の派遣にはじまりその後本格的な移住となり、分村の形が整ったのは昭和十六年の三月ごろであった。ほとんど国策移住のようなものであり、日用品の配給から生活資金の長期貸し付けまで、いわゆる衣食住に関しては、故郷大子町での生活とは比べものにならないほど豊富で自由だったという。

やがて敗戦、満州国の崩壊と共に生活環境は一変して、着のみのまま、食うや食わずの半捕虜的な抑留生活が始まった。いつ祖国に帰れるのか分からないまま、自分の運命を中国及び朝鮮国の国家と人民に委ねたあなまたまかせの日々であった。

しかし、心は妙に落ち着いていて安堵感があったという。この時期は自分の生・死を自分で決められない境遇だったからだろうと回顧していた。ただ救いは、一人の残留孤児も生き別れもなく全世帯が無事に故郷大子へ戻れたということである。大子へ戻って来て親戚・知人を頼ってもお客様でいられるのは一日だけで、二日目からは何となく居辛くなった。

結局は内原へ戻り、さらに武田村小貫地区へ集団で開拓入植することになった。ここでは自らが生きるために原野の開墾から始めなければならなかった。その体験の厳しさを物語るのが今回の聞き取り調査に協力してくれた方々の口からでた冒頭の言葉だった。

大子町の満州国分村移住から六十年が経っている。しかし大子町の歴史の中では重要な事がらの一つであることに変わりはない。移住当時は小学生だった子供たちのなかにはすでに古稀を過ぎている方もいる。少し遅きに失した感はあるが、できるだけ多くの記憶を呼び起こし記録しておきたいものである。

七月下旬には二回目の聞き取り調査を予定している。

今回の北浦町への訪問調査では斎藤三義・ユミ（旧姓後藤）夫妻、長山三男・堀田くに子（旧姓長山）兄弟、吉沢里子（旧姓斎藤）の皆さんには二日間にわたって貴重な体験談を語っていただきました。また、北浦町教育委員会の皆様にも現地の案内、旅館の手配等の協力をいただきました。記して謝意を申し上げます。

（吉成）

教室は寒かった

教室の格好は今も昔も余り変わらない。明治から大正にかけて四間×五間の形が普及し現在に至っている。だが、昔の教室は窓も天井も透き間が多く、どこからともなく風が入ってくる強い風に窓ガラスがガタガタとなる。そんな教室だから冬は寒い。教室の暖房は、縦横一メートル、高さ三〇センチくらいの木の火鉢が唯一の暖房だった。その火鉢の真ん中に炭火をおこし、五徳の上にやかんがかけてある。

当時の履物は藁ぞうりや運動靴くらいで、晴れた日には良かったが、雨や雪の日は具合が悪い。長靴やゴム靴などを履く者は少なく、下駄を履いてくる者も多かった。

草履や下駄は勿論、ズックの靴でも中までしみ通り足袋まで濡れてしまう。教室に入ると急いで足袋を乾かす。

教室では足袋のままでいるか、端布などを混ぜて編んだきれいな藁ぞうりの上履きを履いていた。この藁ぞうりに足袋というのが一般的なスタイルだった。

この木の火鉢は内側にトタンが張っており、灰が敷きつめてある。朝のうちに炭火をおこし、各教室に配つてあるく当番があつて、教室に炭と火種を置いて行く。あとはその教室で面倒を見ながら火を消さないように注意する。火種の置き方によっては消えてしまうこともある。「冬上夏下」と言うように冬は火種を上にとよくおこるようだ。

これだけしか無いのだから教室全体が暖かくなることは望めない。朝のうちとか天気の悪い日などはとても寒くて手がかじかんでしまう。鉛筆にも力が入らない。手に「ハーハー」息を吹きかけて勉強したものだ。おまけに足の指先も冷たくなる。ひざからつま先までびったり揃えて、体をちぢこめて少しでも

体温を逃がさない様にしている。時々手のひらを太ももの下やわきの下などに入れて温める。

どんなに寒くてもそこは子供だから、休み時間は外へ出て走り回る。雪が降れば雪合戦をやる。夢中でやっていると汗が出る様になるが、手は冷たくて痛いほどになり、急いで教室に駆け込み、火鉢で手をあぶる。急に温めるとかえって痛くなる。

どんなに冷たくても、我慢してやっていると次第に手がほてってきて暖かくなり。雪に触れてもなんともなくなるものだ。

この火鉢を一日中使っていると、底の方まで熱くなり、灰が薄いと底が焦げ出すこともある。だからたいいてい午前中しか使わなかった。

昭和三〇年頃になって、ようやくストーブが入り教室は暖かくなった。最初は薪ストーブだった。子供たちが当番で家から薪を持ってきた。教室の後ろの方に重ねて置いたりした。二、三年後には石炭を使う様になったが、これは火をつけるのが容易でなく、なかなか燃えなかつたり、急に火力が強くなり、ストーブが真っ赤になつたりした。石炭バケツにいっぱい石炭を入れて配り歩くのも、なかなか力の要る仕事だった。次に石油ストーブになったが、最初は石炭同様、煙突をつけて燃やしていた。煙突の取り付けや掃除もなかなか大変だった。今のストーブは有り難いと思う。

(石井)



【史料紹介】袋田村の事蹟簿について

明治38年、内務省は町村行政の手引書として「地方自治ノ指針」を編さんして各府県に配布した。これを受けて茨城県では38年7月に茨城県訓令「郡市町村事蹟調査ニ関スル規程」を出して各市町村での統計調査を義務づけた。現状への対応のためには、各地域の歴史や現状を把握するための調査が必要であると、「事蹟簿」の作成が始められたのである。市町村の事蹟簿は三か年継続用の形式にしたがい、毎年記載され、作成された「事蹟簿」は永久保存を義務づけた。「事蹟簿」の様式は、地勢、管轄沿革、字名、役場位置、名勝・旧蹟、土地、戸口、農業、山林、水産、工業、商業、教育、租税、財政、議会・条例規則、災害、雑事など約一六二項目から構成されていた。

茨城県立歴史館は写真版として、袋田村の事蹟簿を明治38年から昭和18年までの13冊を所蔵している。その中から主なものを紹介しよう。

・地勢

明治21年4月1日法律第一号を以て市制及び町村制を公布せられ明治22年3月15日茨城県令甲第十二号を以て従来の町村を分合し袋田、下津原、久野瀬、南田気、北田気、池田の六ヶ村を合せ袋田村と改称し旧村名は大字とし之れを存せられ以て今日に至り、本村は往古奥州白川郡に属し依上荘保内郷に隸す、中古久慈郡に属せり、依て今尚郷名を存す、大字袋田は往昔瀧村と称せしが後現今の名に改りしと、蓋し、瀧村は月居山中に大瀑布あるに依てならんか、下津原は旧瀧本郷の称ありしか后ち今の名称に改まり南田気、北田気はもと田気村と称し一村なりしか、久慈川其中央を貫通するを以て寛永年度に至りて二村に分轄せり、久野瀬は今尚考証するものなし、

・現住人口

明治38年 男一二八〇人女一一二〇人計二四〇〇人 世帯四四五戸
・所在の官公署 昭和16年、袋田駅 袋田郵便局 巡査派出所

食糧検査袋田出張所 福島電灯株式会社袋田派出所 袋田農業組合

・鉱泉

湯本湯 字湯端 硫黄 楊梅瘡疥癬

林ノ湯 字中山 硫黄 痔症・婦人血症

袋田温泉（昭和10年 45度温泉）字町 硫黄 胃腸婦人血症痔症

田毎ノ湯（昭和10年 32度温泉）字湯島 硫黄 胃腸婦人血症痔症

・名勝 袋田四度瀧（高四〇〇尺 幅二四〇尺）、昭和15年3月27日茨城県告示第一九〇号を以て名勝として指定さる

・橋梁 久慈川橋（久慈川 明治37年木橋） 滝川橋（滝川 明治38年木橋） 小磯橋（滝川 明治38年木橋） 昭和3年鉄コンクリート

・昭和2年、汽車の旅客（乗車四七一七五人 降車四六四五五人）

・手小荷物（出一一四一 入一七三三）貨物（出一九四二 入三二五）

・学校 袋田尋常高等小学校 袋田仲野 明治25年9月創立

下津原尋常小学校 下津原宮ノ前 明治25年12月創立

池田尋常小学校 池田上ノ内 明治25年12月創立

・神社 諏訪神社（袋田） 稻荷神社（下津原）

諏訪神社（久野瀬） 二荒神社（北田気） 吉田神社（池田）

・静神社（池田） 王子神社（南田気）

・寺院 熊野山龍泰院 久慈郡依上村金沢常明寺の末寺

・会社 袋田電燈株式会社 電気業 昭和4年5月創立

袋田製材所 大高菊松 大正7年5月創立

・歴代村長名

鯉木穆（明22〜24） 桜岡敏38歳（25〜27） 益子祐次34歳（27〜29）

桜岡伴次郎36歳（30〜35） 佐藤新之介53歳（35） 桜岡敏48歳（35〜36）

桜岡亀吉29歳（36〜37） 石田潤之介53歳（36〜37） 桜岡水之介32歳（38〜43）

桜岡力54歳（44〜44） 小室甚市郎43歳（4〜8）

丹野信之介54歳（8〜12） 野内兼太郎57歳（12〜昭和2） 桜岡伴次郎69歳（3〜4）

見代鉄之介53歳（4〜9） 菊池磨古刀42歳（10〜16）

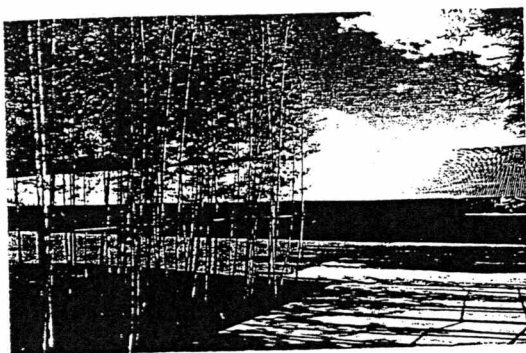
菊池秀雄60歳（昭和16〜）

（野内）

【資料館めぐり】

広重美術の一大発信地をめざして

― 栃木県馬頭町・馬頭町広重美術館 ―



茨城県と境を接する栃木県馬頭町は、山懐の豊かな自然と温泉を活かした観光地として、近年知名度を高めつつある所です。その馬頭町に、もう一つ魅力的な文化施設が誕生しました。昨年の十一月三日にオープンした馬頭町広重美術館がそれです。

美術館建設の動きは、平成八年四月に美術品や書籍など約四千二百点の寄贈の申し出を受けたことから始まります。寄贈品のなかには、江戸時代後期の浮世絵師として著名な歌川広重の肉筆画約五十点、版画二百点など貴重な美術品が多数含まれていたもので、町は早速受け入れ準備に取り掛かります。町議会の議決、基本構想づくり、設計、入札、建築等々、通常の美術館

建設では考えられないスピードで事が運ばれ、短期間のうちに完成を見たわけです。

当美術館の特徴をなすのは、何といつても充実度では質・量ともに他に類例を見ない広重の作品群です。重要文化財級と評される肉筆画、「江都八景」と「富士十二景」もそのなかに含まれています。館名に広重の名が入っているのも、広重の肉筆画を中心に展示し、その研究成果を広く世界に発信しようとの意図が込められているからに他なりません。

特徴はもう一つ、建物それ自体からもうかがうことができます。庄野の雨、三島の朝霧、蒲原の雪のように、自然現象を見事に絵画化したところに広重作品の真骨頂があるといわれますが、本美術館はそれを建物に表現した点です。細かい木製の格子でつくられた屋根と壁は、春夏秋冬、あるいは朝から夕方にかけての太陽の高低によつて微妙な影を醸し出し、豊かな表情を演出します。この建物だけを見ても飽きることがない、そんな印象を受けます。しかも那須の石、烏山の和紙、八溝杉といった地元の資源を建築材料としてしっかりと活用している点も見逃せません。

当館の運営には、美術館ボランティアと呼ばれる人たちが力を発揮しています。来館者を誘導したり、質問に答えて説明したり、昼食と交通費の支給だけの文字通りボランティアとして大活躍のようです。広重関係の情報発信を中心にしながらも、地域に根付いた、そして他の諸施設と連携しつつ地域振興の核になれる施設をめざす、この生まれたばかりの美術館は種々の意欲的な試みの渦中にあるといつてよいでしょう。(斎藤)

編集人

斎藤典生(茨城大学人文学部)

野内正美(茨城県立歴史館)

石井喜志夫(元教員)

小澤圀彦(太子町教育長)

吉成英文(太子町社会教育課)

井上和司(太子町税務課)

編集発行

遊中の人

太子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡太子町大字池田一六六九番地

三九三三

五五七二六三〇